

- ・問題の作成上、表現・表記をあらためた部分がある。
- ・字数制限は、句読点・記号などをふくむものとする。
- ・答えはすべて解答题紙に記入すること。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

あなたは、いまどこにいるのだろうか。

どこで、このページを読んでいるのだろうか。

あなたがいまいるのは、本屋さんだろうか。図書館だろうか。カフェだろうか。それとも自分の部屋だろうか。どこが一番落ち着いて本が読めるのだろうか。

シーンという耳鳴りみたいな音が聞こえてきそうな静かな図書館でないと落ち着いて本が読めない人もいるし、逆にカフェのバックグラウンド・ミュージックがかかっていると落ち着いて本が読めない人もいる。ぼくの町のドトールというコーヒー店には、毎日のように夕方になると本を読みに来るおじいさんがいる。家に本を読む場所がないのではなくて、たぶんそのコーヒー店が**いい**のだろう。

電車の中でも本を読める人は多い。ぼくもそうだ。ツウキン電車の中では、幅を取らない新書を、しかも自分のセンモン外の新書を読むことにしている。電車の中は、会話もろくにできないくらいうるさい。うるさいのに落ち着いて本が読めるのはどこかへんな気もしている。

② 「落ち着いて本が読める」とはどういうことだろう。それは、周りが気にならないということだ。では、その「周り」とはなんだだろう。周りの人のことだろうか。ちょっとした雑音のことだろうか。たぶん、そうではない。本を読むぼくたちにとって一番「うるさい」のは自分の体だ。(A)、ふつう自分の体を気にしなくてもいいようなシセイを整えてから、ぼくたちは本を読む。本に没頭しているときには自分の体を感じていない。体がかゆくなったりくすぐったくなったりしたら、読書に集中できない。読書に体はじやまなのだ。

※1 もっとじやまなものがある。それは自分の意識だ。そもそも自分の体がじやまと感じるのは、意識が体に向かっているからである。(B)、本の世界に入り込んでいるときには、ぼくたちは自分の体どころか、自分が自分であることさえ忘れてしまっている。(C)、自分を感じていない。自分の意識が全部本の中に入ってしまっ、自分を感じるゆとりもないはずだ。そういう状態を作るためにわざわざ音楽をかける人もいる。別に音楽を聴いているわけではないだろう。意識が自分に向かわないようになればそれでいいのだ。それが、「読書に没頭する」ことだ。

※2 映画やテレビに没頭するために音楽をかける人はいないだろうと思う。ところが、読書するときにはそうする人がいる。読書するときに音楽をかける人は、音楽で「周り」をしゃ断しているのだ。この「周り」の中には自分も含まれる。音楽で自分から自分自身をしゃ断しているのである。

④ こんな風に、文字を読むことしかできない読書に集中するために、ぼくたちは結構高級な技術を使っているのかもしれない。それは、ぼくたちがどうして黙読ができるようになったのかを考えるだけでも、すぐにわかる。

文字が読めないまだ幼い子供は、誰かに本を読んでもらう。物語はまず耳からやってくる。これは読んでではなく、物

受験番号

語を聞いているのである。(D)、物語は体を通してやつてくる。そのうちに自分でも読めるようになる。(E)、小さい子供ははじめは声を出して読んでいる。自分の声を耳から聞いて本を読んでいるわけだ。半分読んで、半分聞いている感じかもしれない。

そのうち声を出さなくなるけれども、よく見ていると唇が^{くちびる}かすかに動いている。人にも自分にも聞こえない声を出して読んでいるのだ。もう少し成長すると、唇は動いていないけれど、指で文字をなぞっている。ちゃんと目で読んでいるけれども、まだ体の力を^dかりないと読めない段階だと言っている。大人でも、急いでいるときには指で文字をなぞることがある。体の動きを^dかりるのである。

そして最後によりやく目だけ動かして本を読むことができるようになる。これが黙読だ。物語に興味を示し始めてからこうなるまでに、ふつう数年はかかる。気の遠くなるような時間だ。読書のために自分を消すことがいかに大変かがわかる。

ぼくたちは、^eふだんこういう過程を経^eて本が読めるようになったことを忘れている。しかしこうして^{※3}振り返ってみると、長い時間をかけてようやく大変高級な技術を身につけたことがわかる。この技術の^{かたど}勘所は、読書の最中に自分を限りなくゼロに近づけることにある。自分を忘れることにある。

〔未来形の読書術〕 石原千秋

※1 没頭：…何もかも忘れて、ある物事に熱中すること。

※2 シャ断：…さえぎって止めること。

※3 勘所：…はずしてはならない最も重要なところ。

問一 〓 a k e のカタカナを漢字に、漢字はひらがなに直さない。

問二 空白部 A k E にあてはまる言葉を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし イ だから ウ つまり

問三 ① 「家に本を読む場所がないのではなくて、たぶんそのコピー店がいいのだろう」とありますが、なぜですか。解答らん^{らん}に合うように文中から十六字でぬき出しなさい。

問四 ② 『落ちていて本が読める』とはどういうことだろう。それは、周りが気にならないということだ』^だについて以下の問いに答えなさい。

1 ここと言う「周り」とは何ですか。文中から五字以内でぬき出しなさい。

2 落ちていて本を読むために1よりさらに気にならないようにするものは何ですか。文中から五字以内でぬき出しなさい。

問五 ③ 「そうする人」とはどうする人ですか。文中から十字以内でぬき出しなさい。

問六 ④ 「結構高級な技術」とはどのような技術ですか。文中の言葉を用いて十字以内で答えなさい。

問七 ⑤ 「こういう過程」とありますが、どういう過程ですか。次の各文を正しい順に並べて記号で答えなさい。

ア 自分で声を出して読む。

イ 誰かに読んでもらって、それを聞く。

ウ 指で文字をなぞりながら読む。

エ 目だけを動かして読む。

オ 声を出さずに唇をかすかに動かして読む。

問八 次の各文のうち本文の内容にあてはまるものには○、あてはまらないものには×と答えなさい。

ア 電車の中で読書ができる人は、雑音の中でも自分を消すことができる人である。

イ 自分の意識が体に向かうことで、読書に集中できるようになる。

ウ 本に没頭するためには音楽をかけたほうがよい。

エ 文字が読めるようになって、すぐに黙読はできない。

オ 指で文字をなぞりながら読むのは、子供だけである。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

哲也は竜一の母親と知り合いで、自分も若いころ野球をしていた経験がある。竜一は現在中学三年生で、今春から関西の名門高校の野球部に進学する予定になっていて、正月の間、哲也の店でアルバイトをしている。

※

小上りの客に焼酎と湯の入ったポットを持っていった竜一に哲也は声をかけた。

「竜一、この様子なら一人でやっていけるから閉店前まで、そこいらを走ってきていいよ」

哲也の声に竜一が顔を明るくして笑った。

すぐに竜一はジャージに着替えて、調理場の奥から、それじゃ哲也おじさん、行ってきます、と声をかけた。

「大通りは歩道を走れよ。今夜は暴走族が出ているかもしれないけど相手にするなよな」

はい、と返事の声が木戸を開けて吹き込んできた木枯らしの音にまぎれた。乾いた靴音が二歩、三歩届いて消えた。

哲也は小上りの客に海苔を出して、また時計を見た。十時半になる。カウンターから木枯らしに揺れる暖簾越しに通りが見えた。他の店は **A** 閉じて、街路灯の明りが人通りのない路地を照らしていた。

哲也は海苔が切れそうなのに気づいて、調理場に行った。

棚戸を開けて、海苔の入った缶を出した。中から二束を出して、台の上に置いた。封を開け、ホウソウシを捨てようとポリバケツの方を見ると、竜一のスポーツバッグの脇に彼が今しがたまできていた店の仕事着が丁寧に畳んであった。折り返したんだ上着とズボンの角を **B** 揃え、床には下駄がきれいに並べてある。

——大人になったんだ……

① 哲也は竜一がよちよち歩きを始めた頃を思い出した。少し転んだだけで、すぐに半ベソを掻く、弱々しい子供だった。

それが今は、同じ歳の若者と比べても、落ち着いているし、頭の回転も速い。何より思いやりがある。

五日前の、年の瀬にやってきた日、哲也は竜一が夜になって、この界限の店から出た残飯を漁る浮浪者に、食べられそうなものを仕分けて渡してやっていたのを調理場の奥から見ていた。薄汚れた浮浪者が近づくのさえも嫌がる若者が多い中で、竜一は **C** 声を掛けてやり、食料を与えていた。その光景を目にした時、哲也は、

② ——これで十分だ……

と思った。

別に人より出世したり、大金を得たりすることが人生の幸福などと哲也は考えたことがなかった。

哲也は、それを銀座の修業時代に親方から教わった。

「哲、いいか。職人の商いは同じお客さんと長く続くことが肝心だ。お客さんは毎日一生懸命に働いてから、俺たちのすしを食べにみえるんだ。男の人生だからな。良いことより辛いことの方が多いに決まっている。そういうお客さんが安心してすしを握ることだ。地味でいいんだ。味は人だぞ。暖簾なんかじゃないからな。味は人だ。③ その人が大事だ。お客さんに對して思いやりがあれば、すしの商いの半分はできたも同じだ。金儲けのすしはすさむ。④ 派手なすしには味わいがない。

D 覚えとけ。」

哲也は、この五日間、竜一を見ていて、すし屋になる気はないのだろうか、とさえ思った。

——無理だな……。あのタイカク^cで、あのボールを投げられる若者が、野球に夢を託さ^{たく}ないはずはないものな……。

竜一に兵庫県にある名門高校の野球部のセレクションを受けさせるために、神戸へ行かせたいと、島根の浜田に住む宮内理香子から手紙をもらったのは、去年の秋の終りだった。

哲也も竜一が島根の中学生の中でもヒョウバン^dの投手であるのは、理香子から聞いて知っていた。

十年前、まだ銀座で修業をしていた時、理香子から手紙が届き、竜一が自分から野球をやりたいと言いつつ知り、スポーツ用品店から少年用のバットとグローブを送ったことがあった。

——あの子が野球をやりはじめたか。

哲也は、竜一が小学生の時、一度休みを取って、彼の野球をカンセン^eに行ったことがあった。レギュラーではなかったが、ベンチで上級生のゲームを声を出して応援^{おうえん}している姿を見て、懐かしいものを見た気がした^⑤。

その頃の竜一の身長は高くなかったし、どちらかと言えば弱々しい少年に映った。それが理香子の手紙で、小学校の高学年に上がった頃から、身体も急に大きくなり、学校のエースになって活躍^{かつやく}していると知らされた。

野球の強い中学校に入学し、電車で一時間かけて学校へ行きはじめた。一年生の時からエースになり、活躍しているということだった。

——やはり野球を覚えたのが良かったんだ。

哲也はもう一度、竜一の畳だ仕事着を見直し、野球を続けたことが竜一を礼儀正しい若者にしたのだと思った。

勿論^{もちろん}、学校の教師をしている理香子の躰^{しづせ}も良かったのだろう。母子^⑥だけの二人暮らしは決して裕福ではあつたはずだ。それが竜一に（ ）を与えた気もする。

十五歳といえば、哲也も毎日、グラウンドに出て泥^{どろ}だらけになって白球を追っていた。

——あの時代が一番楽しかったのかもしれない……

二年半振りに、スポーツバッグとバットケースを手に店の表木戸に立っていた竜一を見た時、たった二年半の間で、こんなに身体が大きくなるものなのかと、哲也は驚^{おどろ}いた。

II

白い歯を見せて、**E** 哲也に頭を下げた竜一には、転んで半ベソをかいていた少年の面影^{おもかげ}は失せていた。年の瀬の二日は忙しい日が続いて、竜一はアルバイトの彩子^{さいこ}にあれこれ命令されながら手伝いをしていた。元日の朝、哲也は竜一をキャッチボールに誘^{さそ}った。

冬の澄^すんだ青空がひろがった朝だった。

哲也と竜一は車で、武庫川の川原に行った。

そこは、堤防^{ていぼう}沿いに美しい松林が続く、哲也のお気に入りの場所だった。

「ミ・ソ・ラ」伊集院 静『ぼくのボールが君に届けば』より

※小上り：すし屋や小料理屋などで、いす席とは別に座って飲食できるようにした畳敷^{たたみ}きの客席のこと。

問一 —— a k e のカタカナを漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二 A E に入る最もあてはまる言葉を次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
 (ただし、同じ言葉は一度しか使えません)
 ア やさしく イ ぺこりと ウ すでに エ よく オ ちゃんと

問三 ~~~~~ I 「暖簾」 II 「面影」のここでの意味として最もあてはまるものを次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

I 暖簾

- ア 店の入り口にかかっている布。
- イ 部屋のしきりに使われる短い布。
- ウ 長年の営業で手に入れた財産。
- エ 代々受けつがれてきた店の信用。
- オ ずっと一緒に働いてくれる仲間。

II 面影

- ア すっかり変わってしまった顔立ち。
- イ 自分の知っている昔のすがた。
- ウ ぼんやりとした思い出せない顔。
- エ 死んでしまった人の思い出。
- オ うつすらと見える人の様子。

問四 _____ ①の文の中から、ぎ態語を抜き出さない。

問五 _____ ②「これで十分だ」とはどういうことですか。最もあてはまるものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 竜一が父親のいない身でありながら、礼儀正しく頭の良い思いやりのあるひとりの人間になっていることを知り、満足する気持ち。
- イ 竜一が浮浪者をさけることもなく、やさしい若者に育ったことから、人のために生きる心構えができていると感心する気持ち。
- ウ 竜一がきちんと仕事着を畳み下駄を並べていたことから、アルバイトとしてやとうには最適だという気持ち。
- エ 竜一が礼儀正しい若者になっていたので、一人前のすし職人にするため親方のところへ修業に出しても大丈夫だという気持ち。
- オ 竜一がりっぱなタイカクになっているのを見て、高校に入っても野球選手としてやっていけるにちがいないと確信する気持ち。

問六 _____ ③「味は人だ」というのはどういう意味ですか。その説明として最もあてはまるものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア すしをにぎるには長年の修業が大事で、そこでつちかわれた人間関係が店を繁盛はんじょうさせるという意味。
- イ すしの味にはにぎる人の心が表れるので、悪いことやずるいことをしてもすぐにわかるという意味。
- ウ すしをにぎるには新鮮しんせんなネタが大切で、決してもうけのことばかりを考えてはならないという意味。
- エ すし職人に大事なことは客のことを思いやる心であって、その心が味となるのだという意味。
- オ すしの味とは実際のネタやご飯ではなく、にぎる人の持つ個性に他ならないという意味。

問七 _____ ④「派手」の対義語を本文中からぬき出さない。

問八 _____ ⑤「懐かしいものを見た気がした」のはどうしてですか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

問九 _____ ⑥「母子だけの二人暮らしは決して裕福ではあつたはずだ。」には表現のまちがいがあります。その部分を五字以内でぬきだし、正しく書き改めなさい。

問十 () に入る最も適当な言葉を本文中から四字でぬき出さない。

三 次の問いに答えなさい。

問一 次の二つの文を、例にならつて意味を変えずに、省略できるところは省略して一つの文に書き直しなさい。

(例) わたしは英語を習っている。わたしはピアノを習っている。

↓ わたしは英語とピアノを習っている。

- 1 日本食は季節感を大切にす。日本食は世界中で好まれている。
- 2 母から時計を受け取った。時計は父が愛用していた。
- 3 兄は陸上競技が得意だ。兄はきのうから競技会に出場している。

問二 次の語句とよく似た意味の熟語をあとの()の中の漢字を使って書きなさい。

1 短所 2 方法 3 賛成 4 進歩 5 立派

(欠・事・意・手・発・段・見・同・点・達)

問一	
e へ	a 通勤
	b 専門
	c 姿勢
	d 借

受験番号

問二 A	イ
B	ア
C	ウ
D	ウ
E	ア

問三 音楽で自分から自分自身をしや断したいから。

問四 1	自分の体
2	自分の意識

問五 音楽をかける人

問六 自分を忘れる技術

問七 イ ↓ ア ↓ オ ↓ ウ ↓ エ

問八 ア	○
イ	×
ウ	×
エ	○
オ	×

問二	
e 観戦	a ろじ
	b 包装紙
	c 体格
	d 評判

問二 A	ウ
B	オ
C	ア
D	エ
E	イ

問三 I	エ
II	イ
問四	よちよち
問五	ア

問六	エ
問七	地味

問八 哲也も同じ年ごろのころから野球をやっていて、竜一の姿を見てかつての自分の姿を思い出したから。

問九	あつた
	↓
	なかつた
問十	思
	い
	や
	り

問一	
1	季節感を大切にする日本食は、世界中で好まれている。(「世界中で好まれている日本食は季節感を大切にする。」も可)
2	母から父が愛用していた時計を受け取った。(「母から受け取った時計は、父が愛用していたものだ。」も可)
3	陸上競技が得意な兄は、きのうから競技会に参加している。(「きのうから競技会に参加している兄は、陸上競技が得意だ。」も可)

問二	1 欠点
	2 手段
	3 同意
	4 発達
	5 見事

三